令和３年度　経済学研究科入学試験問題（一般　Ⅰ期）

外国語科目（日本語）

受験番号
ＭＥ

【すべての問題に解答しなさい】

《問題１》

問題文は宇根豊著『日本人にとって自然とはなにか』の一部である（節見出し・小見出し・図４・空行を省略し、体裁を一部改変してある）。この問題文をよく読み、問１から問７までの問題に答えなさい。

「自然」という言葉は不思議な言葉です。たとえばみなさんは「自然石」と言われると、自然な感じの石という意味なのか、それとも人工の石じゃない、自然界から産出する石なのか、どちらだと思いますか。「自然に任せる」と言うときも、「なるようになる」という意味なのか、「自然界の摂理に従う」という意味なのか、どちらでしょうか。

［　　］「自然」という言葉は二つの意味を持っていて、案外その区別がつかない言葉なのです。その理由をこれから明らかにします。

みなさんは「自然」という言葉をよく使いますね。「人工的でない自然な感じがいい」「人間は自然を破壊しすぎたので、これからは自然を大切にしたい」と言うときの「自然」は同じ意味ではありません。あらためて意味を説明するまでもないことですが、前者は「おのずからそうなっている、あるがままの、ひとりでに、生まれながらに、人為の加わらない」の意味で、「自然な感じ」「自然にできた」という使い方をします。後者は「いわゆる自然環境である山川草木、海や空、風や水などの人間や人工物以外の森羅万象」の意味で、「自然環境を守る」「自然が好きだ」などと使います。

どちらも日本語として、すっかり定着していますが、前者も後者も輸入された言葉です。漢字と漢語は中国から輸入されたものです。ところがその漢字を組み合わせて、あるいは当てはめて、日本で新しくつくった「漢字の言葉」もあります。「物語」「神社」「技術」「哲学」などは、日本で生まれた言葉です。

ところで、これまで考えてきた「自然」は漢字ですが、どちらでしょうか。両方なのです。「自然なまま」、と使うときの「自然」は、「漢字」と言うぐらいですから中国の「漢」の時代以降に日本へ渡来したものです。もう一つの「自然を保護する」と使うときの「自然」は、明治時代に日本でつくられた言葉です。しかも、「社会」「個人」「権利」「自由」「恋愛」「哲学」と同じように、英語を翻訳するときに造語された「翻訳語」です。ということは、どちらも外国からの輸入語なのです。

【次ページに続く】

【前からのつづき】

とくに「自然環境」の意味の「自然」が新しい翻訳語（輸入語）だと言っても、多くの日本人はなかなか信じようとはしません。「そんな馬鹿な。こんなに自然がいっぱいある国なのに、その自然を指す言葉がなかったなんて信じられない」という人が少なくありません。大昔からの日本語だと思っているのです。じつは、私もこのことを知ったのは二二歳の時に柳父章（やなぶあきら）さんの『翻訳語成立事情』を読んだときです。あの時の驚きは一生忘れないでしょう。

しかも、この翻訳語の「自然」が田舎の百姓の間で普通に使われるようになったのは、戦後のことです。また最初の中国から渡来した「自然」が広く使われることになったのは、平安時代の末期だと言われています。外国の言葉と考え方・感じ方の受け入れにかなりの時間がかかったのは、それなりの事情があったのです。それも含めて、この二つの「自然」の言葉の歴史をたどってみましょう。

順序が逆になりますが、二度目の輸入（翻訳）から話を始めます。この輸入の影響が、現代の日本人の自然観に大きな変化をもたらしているからです。

江戸時代末期から明治時代後半まで、英語のネイチャー（nature）の翻訳語はなかなか定まりませんでした。「自然、天地、万物、造化、宇宙、天然」などという翻訳語が使われましたが、決め手に欠けました。やがて「自然」という言葉に落ち着いていくのは、明治三〇年代だと言われています。それにしても時間がかかったものです。明治期に翻訳語として新しく造語された「社会」「自由」「個人」「権利」「存在」「近代」「恋愛」「彼、彼女」「美」がすんなり普及していったのに比べると、とても手間取ったのです。それは、それまでの「自然」がすでにあり、しかも名詞ではなく、形容詞的、副詞的な使われ方をしていたからです。みな

【次ページに続く】

【前からのつづき】

さんは「天地自然」という言葉を、「天と地と自然のこと」だと、すべて名詞だと受けとるでしょうね。ところが明治時代には「天地はおのずからなる」という意味だと受けとる人がほとんどだったのです。

しかし、次第に「自然」が翻訳語として使われることが多くなっていったのは、ナチュラル（natural）が文字通り「自然な」という意味だったからで、こちらは無理なく浸透していきました。それにしても不思議だと思いませんか。ナチュラルの方が日本語の伝来の「自然」に重なるのに、ネイチャーの方は全然重ならないということを。

この章では、あえて古くからの日本語の自然を「自然O」、新しい日本語の自然を「自然N」と表記します。混同しないためです（Oはold、Nはnewとnatureの略です）。

それにしても「自然N」はなぜ明治時代に新しくつくらねばならなかったのでしょうか。私も以前は、なぜ「天地」と訳さなかったのだろうか、と疑問に思いました。しかし「自然N」は人間を含みませんが、「天地」は人間も含むのです。ここがとても重要です。西洋に普及したキリスト教の教えでは、「神さまは人間を造り、そして人間のために自然を造った」のですから、自然と人間は最初から分かれています。[redacted]人間はいつも自然を自然の外から見ることができるのです。

ところがそれまでの日本人は、いつも天地を内側から、内からのまなざしで見てきました。したがって天地の中のさまざまな生きものや現象はよく見えていたのです。したがって、生きものの名前はよく知っていましたし、天候や季節の変化についても豊かな知恵を蓄えてきました。

しかし、日本人は天地の外から天地を見ることはできなかったのです。天上の高天原（たかまがはら）の神々なら見ることができるのではないか、と思うかもしれませんが、高天原も天地の一部ですから、それは無理でしょう。この天地の中で、山川草木、お日様や雲や風、そして動物や土や水などと一緒に、天地の一員として生きて来た日本人にとって、神や人間や人工物以外を指す「自然N」と人間とを分けて見ることは難しかったのです。これは西洋人や「自然N」を身につけている現代の日本人にはなかなか理解できないでしょう。

ところが日本の歴史が始まって初めて、天地を外側からみる言葉「自然N」が、都会の知識人から次第に浸透していくのです。

【次ページに続く】

【前からのつづき】

まったく新しい言葉で翻訳すればよかったのに、それまで一つの意味しかなかった「自然Ｏ」に、別の意味が加わったのですから、しばらくは（数十年は）混乱が続きました。いやその影響は現代にも及んでいます。それまで「自然にそうなる」という意味しか知らなかった人が、「自然環境」という意味で使う文章を見ても理解できないのではなく、「自然にそうなる」という意味で理解しようとして、誤読してしまうのです。まったくちがう二つの意味だから、混同したり、誤解するはずがないと思うかも知れませんが、そうではありません。

明治時代から大正時代に花開いた「自然主義」という文学運動があります。代表的な作家は田山花袋、島崎藤村などです。まあ、日常をありありと書いたものです。この自然主義はフランスのゾラが、自然科学者クロード・ベルナールの影響を受け、自然科学の方法にならって小説を書こうとしたことから影響を受けて始まりました。ところが花袋が「自然を自然のままに書く」と主張するときには「自然なものを自然に書く」と、それまでの伝統的な「自然Ｏ」の意味で理解（誤解）してしまったのです。これは無理もなかったでしょう。しかし、このことに当時の人たちは誰も気づかなかったのです。

現代の私たちだって、「川の中の魚は、とても美しく、しかも自然です」という文章の「自然」を、「自然な感じ」ととるか、それとも「自然の一部です」ととるかは、人によって異なるでしょう。

[redacted]、今日の科学界では別の「自然主義」が影響力を発揮しています。簡単に言うなら「自然現象だけでなく、心の状態も精神も脳が産み出す自然現象だと考えると、すべての現象は自然科学で解明し説明できるんだ」という主張です。こちらのナチュラリズム（naturalism）は正しく伝わっていると言うべきでしょうか。しかし、私たちはこのような、感情や精神まで「自然現象」だと言われると、ちがうんじゃないと思ってしまいます。

もし、この「自然主義」が正しいなら、人間の心も自然科学で解明できることになります。そうするとコンピューターに人間の感情や精神を組み込むことができ、人工知能（ＡＩ）は自然を味わうことができるよう

【次ページに続く】

【前からのつづき】

になります。つまり生きものと機械の区別がなくなるというのです。どうも私たちの理解している「自然」とは、相当にズレがあるような気がします。

そこで、西洋の「自然」という言葉の変遷をたどってみましょう。

「自然」という言葉をさかのぼると、紀元前五世紀のギリシャ語の「ピュシス」にたどり着きます。それがローマ帝国で紀元前一世紀にラテン語訳されて「ナツーラ」となり、それがやがて英語の「ネイチャー」となったのです。ギリシャ語の「ピュシス」は人間も神も含まれていました。ラテン語の「ナツーラ」には人間は含まれていましたが、神は含まれていませんでした。ところがローマ帝国がキリスト教を採用するようになると、キリスト教の「神が人間を造り、そして人間のために自然を造った」という教えで、「ナツーラ」は人間からも切り離されたのです。

そしてさらに一七世紀のガリレオやニュートンらによる「科学革命」によって、新しい「自然」の定義が生まれたのです。それはフランスのデカルトに代表される考え方で「自然は機械のようなもので、そのしくみを人間が解明し説明できる」というものです。これこそが自然科学を推し進める考え方になりました。デカルトは「人間は自然の主人にして所有者である」（『方法序説』）とも言っています。

現代の私たち日本人が「自然N」を突き放して、見たり分析したりする「対象」として扱うことができるのは、自分自身が「自然N」に含まれていないだけでなく、自然現象もやがて科学的に説明できるはずだ、という考え方が「自然N」には含まれているからです。

もっともこうした機械論的自然観に反発して、神・人間・自然を含んで捉えようとする、ゲーテやワーズワースのようなロマン主義も一八世紀から一九世紀にヨーロッパで登場しています（私は個人的にはこちらの方が好きです）。

[redacted]ネイチャーには、日本人が「自然N」に取り入れなかった意味が一つあります。それは「本性・本能・本質」という意味でした。でも、キリスト教の教えでは、神―人間―自然Nですから、人間の本性や本能は「自然N」ではなく、人間に含まれるような気がします。本能や本性ではなく「理性」は神が与えたので人間に含まれるのですが、本性や本能は神が与えた理性でコントロールできないナチュラルなものだから「自然」の方に含む、と考えられたのでしょう。

みなさんは「自然な振る舞いだ」と言われたら悪い気はしないでしょう。ところが西洋人は嫌がるそうです。「洗練されていない」「理性的ではない」というネイチャーのもう一つの意味にとられるからです（こういう感覚は、現代の日本人のほとんどの人には理解できないでしょう。私もよくわかりません）。

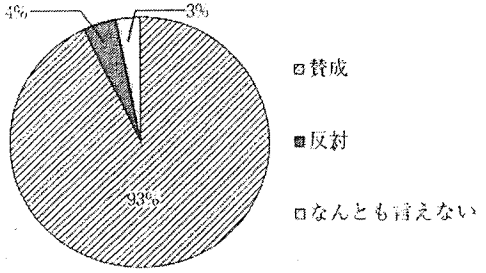
このようにネイチャーの翻訳語である日本語の「自然N」は、ネイチャーとぴったり重ならないどころか、かなりちがったものとして、受け入れられてきたのです。日本語の「天地」は、天も地も（神さまも）人間も、さまざまな生きものも含むもので、むしろギリシャ語の「ピュシス」に似ていると思いませんか。じつは日本語の「自然N」は現在でも、あるときはデカルト的なネイチャーとなり、あるときは「天地」になったりするのです。

【次ページに続く】

【前からのつづき】

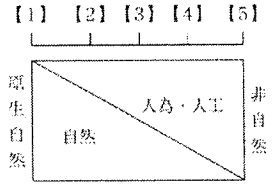
図5　現代の日本人の自然観

【質問A】「人間も、自然の一員である」という考え・感覚に賛成ですか、反対ですか。



調査期間2007年～2018年　総数7511人、回答なしを省いて集計しています。

【質問B】次の図を見て、答えて下さい。



【1】は100％自然、つまり原生自然、【5】は100％人工の場所、【3】は自然と人工が半々ぐらいのところというイメージの絵です。
（問1）あなたにとって、田んぼはどのあたりでしょうか。
（問2）あなたはどのあたりの自然と一番よく触れあってきましたか。
（問3）あなたはどのあたりの自然が最も価値があると思いますか。

	自然度	【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	回答者合計
問1：田んぼのイメージ（%）	百姓	2	23	29	42	4	5532人
	非農家	4	49	27	18	2	1890人
問2：触れあってきた自然（%）		0	68	28	4	0	2117人
問3：最も価値のある自然（%）		98	1	1	0	0	3245人

調査期間2007年～2018年　回答なしを省いて集計しています。

（宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』（筑摩eブックス、筑摩書房、二〇一九年））

問1　文中で使われている次の語句の漢字部分の読み方を書きなさい。

①任せる　②後者　③大昔　④百姓　⑤定まりません　⑥蓄えて

⑦お日様　⑧及んでいる　⑨発揮　⑩ぴったり重ならない

問2　文中の黒く塗られたところ［　　］には接続表現がひとつずつ入ります。それぞれの位置に入る適切な語を書きなさい。

- 1ページ目　→「　　」
- 3ページ目　→「　　」
- 4ページ目　→「　　」
- 5ページ目　→「　　」

問3　1ページ目の二重傍線部「どちらも日本語として、すっかり定着していますが」について、ここでの「どちらも」が何と何を指しているか簡潔に書きなさい。

問4　1ページ目の傍線部「これまで考えてきた「自然」は漢字ですが、どちらでしょうか」について、ここでの「どちら」が何と何を指しているか簡潔に書きなさい。

問5　4ページ目の傍線部「これは無理もなかった」について、なぜ「無理もなかった」のか、理由を簡潔に説明しなさい。

問6　6ページ目の図5の【質問A】と【質問B】について、次の①～③の問いに答えなさい。

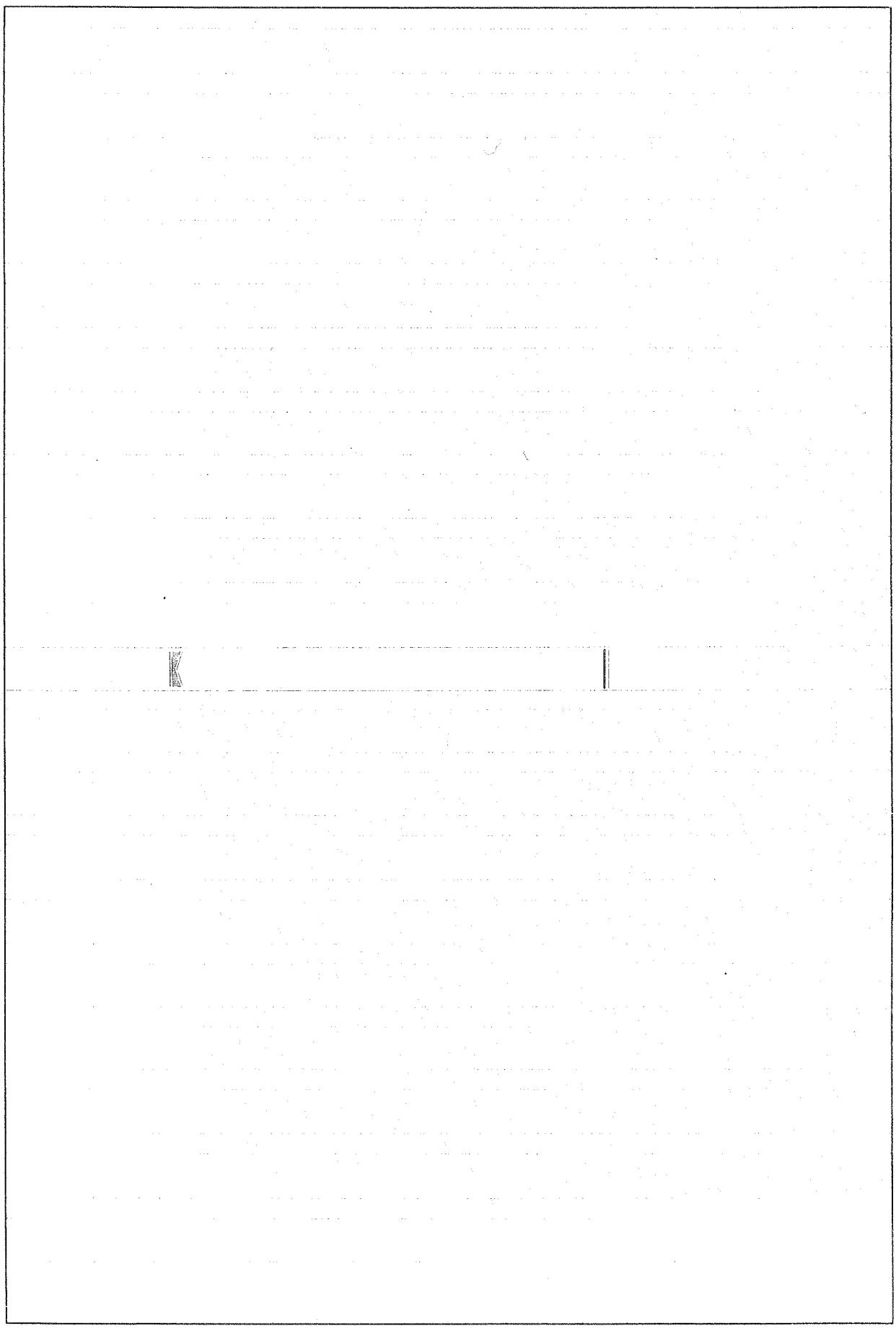
① 【質問A】のグラフが示していることを言葉で簡潔にまとめなさい。

② 【質問B】の回答結果の表から読み取れることを言葉で簡潔にまとめなさい。

③ この2つの質問の回答から、回答者の考え方の傾向について簡潔に説明しなさい。

問7　日本語の「自然O」と「自然N」の言葉の意味（表すこと）について、本文で論じられていることをわかりやすくまとめて説明しなさい。文体はデアル体とする。

《問題2》

インターネット上で入手した情報を論拠として引用する際に注意すべきことを自分のことばで具体的に説明しなさい。別紙、原稿用紙を使用し、文体はデアル体とする（縦書き・横書きは問わない）。

以上